

I 教育目標

人権と多様性を尊重する態度を養い、自ら人生を切り開く力を伸ばすことで、一人一人の自己実現を支援し、主体的に地域や社会に貢献出来る人間を育てる。

II 学校経営方針（中期経営目標）

「真の自己実現にTRY」をスローガンに、教育目標の具現化に向けたキャリア教育の推進を継続し、「基礎・基本の充実」を「質の高い学力」につなげ、生徒の力が「伸びる学校」・生徒の力を「伸ばす学校」として、周囲に信頼され社会に貢献できる人間を育てる。

本府「教育振興プラン」及び「学校教育の重点」を踏まえ、教育課程を創意工夫し日々の教育活動の充実に努め、希望進路を実現し心豊かにたくましく生きる人間を育てる。

- 1 地域に密着し教育で支える学校として、生徒が基礎・基本を習得し実社会での活用法を学ぶことを通じて、様々な課題に対し協働的・主体的に取り組み、解決する力を養う。
- 2 キャリア教育推進により生徒の興味・関心を尊重して主体的な「学び」を支援し、積極的社会生活を営みうる職業観を醸成し生きる力を育み、社会に貢献する人間を育てる。
- 3 生徒一人ひとりを大切に、毅然として寄り添う愛情のある生徒指導を軸に、基本的生活習慣の確立、「自学・自習」の習慣の定着、個に応じた希望進路の実現を図る。

III 本年度学校経営の重点目標（短期経営目標）

1 希望進路の実現に向けた学力の充実

- (1) 授業を大切にす姿勢と授業規律の確保に努め、基礎学力の定着と学力の伸長をねらいとする各取組の実践を図る。
- (2) 個に応じたていねいな指導を行い、わかりやすい授業づくりや学習を支援するために、ICT機器や学習支援システムの積極的な活用を図る。
- (3) 多面的評価に資する観点別評価を充実させ、新学習指導要領・生徒指導提要に沿って、生徒指導の3機能を念頭に、各科目の指導計画及び内容の研究・実践を進める。

2 自己有用感を高める生徒指導の徹底

- (1) 挨拶や身だしなみ、整理整頓、清掃等の基本的生活習慣の確立や、SNS、薬物乱用防止、交通安全等の規範意識の醸成に向けて、学校、家庭、地域が協働して指導を行う。
- (2) 各行事や生徒会、部、ボランティア等の活動をとおして、自己有用感の高揚を図り、主体的に行動できる態度を育てる。
- (3) 生徒個々の背景や抱える課題の改善、克服、支援に向けて、多くの教員が関わりながら温かく丁寧に指導し、必要に応じて外部機関との連携を強化する。
- (4) 「東稜大作戦」等の取組により、生徒と教職員が一体となって、高校生活を楽しくし、生徒の帰属意識と満足度を高め、学力伸長と希望進路の実現につなげる。

3 人権教育の推進

あらゆる場面での一人一人を大切にす指導を通じて多様性の理解および自他の生命と人権を尊重する意識や態度の育成を図る。

4 キャリア教育の推進

本校の各コース・クラスの特徴をより明確化し、それらおよび異学年間における有機的な関わりを通じた積極的な「学び」の展開や、「総合的な探究の時間」等を活用しながら、変動の激しい社会に対応できることを目指したキャリア意識の高揚を図り、職業観の醸成、希望進路の実現につなげる。

生徒に選択と表現の機会を提供し、自ら考え人生を拓く態度を養い、自律かつ自立した生活力を身に着けられる契機とする。

5 その他

- (1) ホームページや学習支援システムなどを活用し、本校の特徴や教育活動の様子、緊急時の対応等の情報を適切に発信する。
- (2) 会議などの精選、ICT、グループウェアの積極的な活用により、教職員の働きがい意識した働き方改革を進め、教職員の心身の健康を維持する。
- (3) 地域との連携を深め地域に貢献するとともに、本校の教育活動を広く社会に知らせることで志願者の確保に努める。

IV 前年度の成果と課題

- 1 学力の定着をねらいとする取組、学力伸長の取組、個々の進路希望に応じた指導による進路実現はおおむねできた。さらに、生徒の実態に即した目標の設定、指導内容・方法の工夫と改善、発達や心身および家庭環境等の課題に応じた適切な支援を含む指導と評価の一体化が必要である。
- 2 各コースとも外部組織と連携しキャリア意識の醸成に向けた取組を実施した。引き続き「総合的な探究の時間」を教科横断的、系統的に実施し、学びの成果を生徒自らが発信する機会を通して生徒の自己有用感を高める工夫を行う。
- 3 基本的生活習慣の確立、規範意識の醸成、自他の人権を尊重する意識や態度を身に付ける指導を継続する。
- 4 必要とされる教育的ニーズに対して支援を行うことができた。今年度もより細やかに情報を収集し、適切な支援につなげる必要がある。

令和6年度 京都府立東稜高等学校 学校経営計画（スクールマネジメントプラン）（ 実施段階 ）

評価領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
				最終	
組織運営	スクールミッション・スクールポリシーに基づいた教育活動を全教職員の共通認識に基づき、具体的な取組の中で実践する。	会議や資料提供によって情報の共有化を図り、日常的に意見交流を行える環境をつくり、スクールミッション・スクールポリシーを踏まえた教育活動について共通理解を図る。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・会議の場だけではなく、校内・外での教育活動や生徒情報等の共有を日常的に図ることができた。 ・清掃指導、進路指導に関する他校視察を行い、全教職員で内容を共有し教育内容の改善につなげることができた。 ・生徒指導提要の理念が各種指導の中で実践されてきているが、一人一人を大切に教育に向け今後も進めていく必要がある。 ・各種事業を有効に活用した取組により、各分野とも生徒たちの豊かな体験活動と進路希望の実現に寄与できている。今後、取組を系統的・有機的に連携させ、その効果を高めていく必要がある。
		研修会の開催や校外研修会、管外視察等への積極的な参加により、本校の教育活動を随時点検、確認する。	A		
	本校の今後の方向性や新学習指導要領、生徒指導提要を踏まえ、地域から信頼されるよりよい学校づくりを実践する。	生徒指導提要を会議や研修会等多くの機会に触れることで共通理解を深め、生徒の成長に繋がる指導方法等の改善に努める。	B		
		各指定事業を本校の教育活動に位置づけて、新学習指導要領に基づき効果的な実施を図る。	B		
学習指導	BYODやICT機器、学習支援システムの積極的な活用を図りながら基礎学力の定着を図る取組を組織的・系統的に行う。	教員対象にClassi、ロイロノート、自動採点システムなどを活用するための研修や資料を提供し、組織としての学習支援システムの浸透を図る。また、基礎学力の定着のための実践例を教員間で情報共有できる場を設ける。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・新規で導入した、ロイロノート・自動採点システムについては、初期の研修・資料提供により、他校と比較しても利用する教員は非常に多い結果となっている。課題としては、他校の有用な実践等を共有する研修・機会をもう少し設ける必要があった。 ・指導と評価の一体化については、本校としての評価の方法が一定浸透している部分はあるものの、来年度は初期段階での研修等で確実に全教員に理解を深める必要がある。
		他校の実践例など情報を集め、教員間で共有する。	C		
	生徒が興味を持つ授業づくりのための工夫と各教科において観点別評価の研究を一層深め、指導と評価の一体化を確実に実行する。	研修や資料の提供により、教員間で指導と評価の一体化についての理解を深め、各教科において指導と評価のPDCAサイクルの実践を促す。	B		
		教科を横断した、公開授業の参観等を利用し、教員同士が意見交流することで生徒が興味を持つ授業づくりについて協議する。	B		
キャリア教育	キャリアコースで培った手法を発展させ、すべての生徒のキャリア意識の高揚を図る取組を実践する。	様々な活動を通して、インプットした力を、アウトプットする機会を設け自己肯定感を身に付けさせる活動を増やしていく。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・各分野において様々な取組を行うことができた。特に醍醐寺でのプロジェクトマップは、地域との関わり及び、アウトプットの場として生徒に対し非常に良い機会となった。 ・1年生での総合的な探究の時間については、学習計画を定め、協働学習的に一定主体性を持って行うことが出来た。 ・各分野の取組、総合的な探究の時間の取組において、校内での情報共有をさらに図る必要がある。ホームページやInstagram等に取組の動画を掲載していく等することで、校内での共有、地域への発信を同時に行うことができるように考えている。
		目標達成のために、地域とのつながりを深め、学校活動と地域社会ができる限り密接に交わる場を設ける。また、校内でも各クラスの取り組みを知る機会を築いていく。	B		
	「総合的な探究の時間」を教科横断的、系統的に実施し、協働学習、プレゼンテーション等をとおして主体性を培う。	綿密な学習計画に基づき、生徒達の表現活動の目標設定を学期ごとに設け、主体的に取り組める活動に結びつけていく。	B		
		探究活動における協働学習を通して、自他を大切にすることを育み、クラス、学年の一体感が高まる学習活動に努める。	B		

令和6年度 京都市立東稜高等学校 学校経営計画（スクールマネジメントプラン）（ 実施段階 ）

評価領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
				最終	
人権教育	自他の生命と人権を尊重する意識や態度を身に付ける取組を実践しつつ、教育活動全体を通して人権感覚の涵養を図る。	日々の授業やホームルーム活動を通して、深い信頼関係に基づく人間関係の構築を促す。	B	B	・各学年2回の人権学習を行い、多様性について理解することができた。さらに互いを尊重し合い、多様性を認め合う心を育てるためには、日々の学校生活のあらゆる場面で継続してアプローチする必要がある。
		人権学習や総合的な探究の時間などをきっかけに、自己の行動のふりかえりや他者との意見交換を図り、多様性を認め合う心および人権を尊重する意識や態度を育てる。	B		
生徒指導 特別活動	基本的な生活習慣の確立、規範意識の醸成を図り、主体的に行動できる態度を育成する。	授業規律を守る意識と行動を第一に、身だしなみ・スマホの使用マナー・自転車乗車マナー等の課題において、生徒自身が判断する場面を設定し、学年部と連携を図り指導する。	C	B	・生徒個々の特性の理解に努めながら個々に合った生徒指導を行うことを目指し、一定の成果が見られた。 ・規範意識を育てるという点では課題が見られ、身だしなみ、スマーとフォン使用マナー、自転車の乗車や駐輪マナー等、見える形での規範意識の醸成を図っていきたい。
		生徒個々の特性の理解に努め、教育支援の手法を用い、個に応じた指導をする。	B		
	人権と多様性を尊重する態度を養い、自己有用感の高揚を図る取組を進める。	既存の校則を生徒の学校生活に活かす工夫と、それに伴う課題の検証を行い、生徒の規範意識を育てる観点で指導する。	C		
		各種行事の取組を自主活動と捉え、生徒の自治能力を高め、リーダーを育成する観点で指導する。	B		
進路指導	キャリア意識を高めて、自らの将来を主体的に切り拓く能力を育成する。	ポートフォリオやICTを活用し、自己の高校生活の振り返りを行い、生徒のキャリア意識を高める。	C	B	・進路希望調査や実力テスト等の学習チェック、各学年の学習時間チェック等の取組を通じて、日々の振り返りや進路意識を高める活動を行った。 ・各種ガイダンスや進路行事について生徒対象以外に保護者対象のものを増やし、多様な進路について早期から本人・家庭への周知を行った。 ・多様な希望進路に対応できるよう補習・個別指導・突破講座等を開講した。 ・国公立・難関私大対策会議を行い、学力上位層についての対応について検討を行った。
		多様な進路について、進路ガイダンスや進路行事を実施し、早期からのアプローチにより、卒業時の進路決定、人生設計のイメージ作りを促す。	B		
	希望進路の実現に向けて進路別取組を実践し、一人ひとりに合った学力伸長を図る取組を行う。	進学補習・個別指導・突破講座等を有効に活用し、各希望進路に必要な力を身に付ける。	B		
		担任・教科と連携し、学力上位層の生徒の情報を共有し、個別指導を行い、学力上位層の生徒の進路意識の向上と、さらなる学力の伸長を図る。	B		
健康安全 特別支援	健康に関心を持ち、適切に行動できる知識と態度を身に付けさせる。	健康診断、生活とからだの実態調査を実施	A	A	・「ほけんだより」を通して健康に関する情報を積極的に発信することができた。 ・本年度は月例大掃除を実施したが月例で行うことができなかったのが課題である。 ・支援が必要な生徒に組織的・継続的支援を行うことができた。
		健康に関する情報を委員会を通して積極的に発信	B		
	教職員・生徒全員で校内の美化に努め、気持ちの良い学習環境を整える。	月例大掃除の実施	A		
		美化週間を実施し清掃点検を実施	A		
	生徒一人ひとりの教育的ニーズに応じて適切な支援を組織的・継続的に行う。	多様な課題を持つ生徒の状況把握し情報を共有する。	A		
		支援が必要な生徒に組織的・継続的に支援を行う。	A		

令和6年度 京都府立東稜高等学校 学校経営計画（スクールマネジメントプラン）（ 実施段階 ）

評価領域	重点目標	具体的方策	評価		成果と課題
			最終		
学校 図書館	効果的な教育活動の実践に向けて、図書館機能のICT化を一層進め、最大限に活用できる体制づくりを進める。	利用者の実態に即した図書館の利便向上に努め、図書館機能のICT化を進める。	B	B	・市内14校が参加した「図書館見学会・図書委員会交流会」を主催した。 ・生徒主体の読書活動を推進するためワークショップや図書館まつりなどのイベントも行った。
		生徒の自主的な活動を通して読書活動の推進を図る。	C		
施設設備 管理	安心・安全で教育効果向上に繋がる施設・設備環境の維持・管理に努める。	定期的に校内巡視を行い、安心・安全に加え校内美化についても取り組む。	B	B	・定期的に校内巡視を行い、危険箇所の早期発見に努め、対応したが、校内美化にまではあまり取り組めなかった。 ・修繕が必要な箇所については事務室内の会議にて共有を図り、分掌全体で対応できる体制づくりに努めた。
		校内巡視後、事務室内でも修繕が必要な箇所を共有する。	B		
修（就）学 支援	修（就）学機会保障のための支援策を充実させ、保護者への情報提供を促進する。	Classiでの連絡を随時行い、修（就）学支援等の周知を徹底し、申請漏れを防ぐ。	A	A	・Classiで保護者に対しこまめに修（就）学支援等の案内をしたものの、確認ボタンが押されないため保護者に伝わったか把握しづらかったが、生徒・保護者に個別に連絡することにより、申請漏れを防ぐことができた。 ・学年部や教務部に積極的に確認し、生徒の状況を掴むようにしたが、より相互的な情報共有の仕組みが必要である。
		生徒についての情報を、担任・学年部長・教務部と共有する。	B		
学年	【第1学年】 生活指導、進路指導などあらゆる面で積極的な声掛けとコミュニケーションを本人、保護者ときめ細かい連携をとる。	学年団で、指導の方針を統一し、学年団が一つになって一人一人の指導に丁寧にあたっていく。	A	A	・必要に応じて、LHR等を活用して生徒達に様々な学習機会をもたせることができた。 ・学習の取組についての指導をより一層充実させ、進路の選択肢を広げていく指導を今後学年主導で取り組むことが課題である。 ・学年団が協力して、多くの生徒との関わりを密にすることができた。
		将来の進路の展望を持たせ、学習活動の大切さ、学びの目的、学習規律を様々な場面で伝える機会をもつ。	B		
	【第2学年】 中核の学年として、自発性と協調性を養う。また、基本的生活習慣を身に付けて学校生活を送り、他者への人権に配慮した行動ができるようにする。	校外学習や研修旅行、委員会活動の中で、生徒自身が企画運営できる機会を設け、自己決定・自己選択をすることで、自主性や責任感を養う。	B	B	・必要に応じて委員会を開催し、研修旅行に向けて学年集会等を行うことができた。 ・きめ細やかな声かけや面談は実施することができた。家庭連絡も密に行い、状況を丁寧に伝えることで家庭と協力して生徒指導に繋げることができた。 ・来年度進路実現を達成するにあたり、家庭学習も含めて学習環境を整えていくことは今後も課題である。
きめ細やかな声かけや面談、家庭との連絡を密にして、SHRから一日を過ごせるようにする。また、学校活動全体を通して人権意識の啓発を目指す。	B				
【第3学年】 進路実現に向けて、各自がそれぞれの場面で責任感を持って行動する習慣を持たせ、社会へ出るための心構えをつくり、充実した高校生活を送らせる。	きめ細やかな声かけや面談、家庭との連携を通して、ミスマッチのない進路実現に向けて、適切な指導・助言を行う。	B	A	・きめ細やかな声かけや面談ができた。特に、進路指導として、夏季休業中、総合型選抜に向け、教科担当と連携しながら個別の指導を行うことができた。 ・文化祭においては、生徒が主体的に行動し、各クラスの演劇を完成させることができていた。文化祭・体育祭ともに、生徒自身で振り返り、それを学年全体に発信する機会を設けることができた。	
学校行事や委員会活動、卒業アルバム制作等において、生徒自身が主体的に企画運営できる機会を設け、集団の中での役割を自覚し、責任のある行動がとれるように指導する。	A				

令和6年度 京都府立東稜高等学校 学校経営計画（スクールマネジメントプラン）（ 実施段階 ）

評価領域	重点目標	具体的方策	評価最終		成果と課題
芸術	基本的な授業態度を定着させる。作品を完成・発表させるまでの過程・工程の自主的思考力・判断力を建設的に身に付けさせ、自己有用感をもたせる。	授業を大切にさせ、授業規律を守らせることで、生徒が安心して受けられる授業を展開する。 単元毎に、生徒が自主的に考え、行動できていることを評価する。また、その評価を積み重ねることで、生徒の情操感や達成感を育む。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・安全に配慮した指導を徹底することができた。 ・多くの制作や発表を通して自己肯定感を高め合い、豊かな心を育む授業を行うことができた。 ・また、作品制作や発表の際には相互理解で終えるのではなく、探究的な学びに繋がるよう指導を行うことができた。 ・今後は他教科と連携した授業の実施や、有効的なICTの活用方法をさらに追求していきたい。
	作品を完成・発表させるまでの過程・工程の自主的思考力・判断力を建設的に身に付けさせ、自己有用感をもたせる。	時間をかけて取り組む過程を大切に、作品を愛する心や情操感を養う。 作品の完成や発表だけでなく、取り組む過程・工程等、生徒が自主的に考え、行動できていることを評価する。	A		
英語	英語の基礎的な知識の定着を図る。	学びなおしを積極的に行い、早期に生徒の躓きを把握し、対応する。 提出物や小テストを利用し、家庭学習習慣を確立させるとともにICT機器を活用し、分かりやすい授業や学習支援を行う。	A		
	英語を通して言語や文化に対する理解を深め、コミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。	パフォーマンステストやTTを活用し、4技能の統合を目指す取り組みを定期的・継続的に行う。 GTECを活用し、生徒の学習意欲や学力の向上を図る。	B		
家庭	社会と家庭生活に目を向け、自分自身の問題として、主体的に生活の充実と向上を図る。	主体的に生きる生活者として、必要な知識と能力を身につけることを目標に、実験・実習を取り入れる。 自分らしい生き方について考え、生徒自身が主体的に考える力を育てる教材を工夫する。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ・新たな取組として、マタニティ体験、飲料の糖度実験、金融教育に取り組んだ。 ・阪神淡路大震災当時の医療従事者の活動に学ぶ授業、災害と避難所に関する授業（マネジメントと合同）にも取り組んだ。 ・1年生家庭基礎では、年間を通じて学習方法について指導したが、学習意欲が向上しなかった背景について検証している。
	基本的な授業態度、学習に臨む姿勢を身につけさせる。	授業規律を確保し、学習に臨む態度を身に付けさせる。 考査前の学習の仕方を指導する。	B		
情報	問題の発見・解決に向けて情報と情報技術を適切かつ効果的に活用する技能を習得させる。	実習を通して、問題の発見・解決に向けて様々なアプリケーションソフトを取り扱いながら情報活用能力を高める。 主体的・対話的な活動を積極的に行い、自己有用感を高めることができるように指導内容を工夫する。	B		
	情報社会と人との関わりについて理解を深め、情報社会に主体的に参画する態度を養う。	図解や動画など様々な資料を利用しながら、情報社会に興味・関心を持てるように指導する。 情報社会と人との関わりについて、実践的な学びになるように指導内容を工夫する。	B		
学校関係者評価委員会による評価	学習環境を整えるために月例大掃除を実施するなど、取組を進める中で学校全体に学校美化に対する意識が向上している。教育活動全体の中で非認知能力などの社会性を築く力を高める取組を継続して進めていくことが大切である。生活規律の指導においては初期指導を充実させるとともに、日常の様々な場面でその意義について生徒と対話する過程を大切に取組んで欲しい。				
次年度に向けた改善の方向性	授業を基本に個に応じた粘り強い教科指導を継続するとともに、コースや分野の特色ある学びや活動を通して生徒の学力向上を図る。3年間の学習・生活の基盤形成として初期指導を丁寧に行い、自ら考え行動できる力を育むため、教科指導、生徒指導、進路指導のさらなる充実に向けて学校全体で取り組んでいく。				